

青蓮院藏不動明王二童子画像の制作者について

—南都由来の造形と外来様式の統合—

川野憲一（神戸市立博物館）

京都・青蓮院に伝来する絹本著色不動明王二童子画像（以下、青不動とする。）は、不動態の最高傑作として知られ、国宝に指定されている平安仏画の最高峰作品である。

名品故にこれまでも多くの先行研究が存在するが、それらの多くは、主に青不動の制作に際し参照図像及び典拠経典の決定をおこなったと考えられる僧侶・宗派の解明を目的とした図像学的考察であり、天台宗、真言宗という二宗派の制作への関与が想定されている。発表者もかつて、青不動制作当時に日本に存在した図像（イメージ）、経軌（テキスト）の探索、当時の社会情勢の分析を通じて、その制作に第十八代天台座主・良源周辺の僧侶の関与を想定した。しかしながら、活況を呈してきたこのような青不動の図像学的研究に比し、この作品を実際に制作した制作者・絵師については、比較対象とする平安仏画の量的不足によって表現に関する深く緻密な考察が困難であったり、また、文献上の制約もあつたりして、これまで真正面から取り上げた論考は存在していない。現状は、伝来する不動明王を描いた白描図像との類似から、玄朝（987年文献により生存確認）、円心（文献により11世紀～12世紀頃の生存確認）などがその制作者候補として漠然と想定されている状況である。断言はされていないが、中野玄三氏は玄朝、有賀祥隆氏は円心及びその周辺の絵師の制作への関与を想定されている〔中野玄三「青不動の成立」（『画像不動明王』所収）京都国立博物館 1981、有賀祥隆 作品解説「不動明王二童子像 青蓮院」（『日本美術全集7 曼荼羅と来迎図』所収）1991 講談社〕。即ち、現在においてこの平安仏画の最高峰作品を描いた絵師が“誰であるのか”という問いは十分に解明にされていないと言える。

本発表では、このような状況の中、史資料の制約を承知した上で、この青不動という平安仏画上孤高の傑作を“誰が描いたのか”というシンプルな問いに対して、従来から制作者候補として名の挙がっている“玄朝”という解を与えることを目的としている。そのために以下の手続きをとる。

まず、青不動の制作年代を、その図像的特徴・表現様式から検討し、10世紀末～11世紀初め頃であると推定する。次に、青不動にみられるいくつかの特徴ある表現に検討を加え、奈良時代に中国・唐より伝わり、平安遷都以前の南都で制作された造形作品にみられる“エネルギー化生表現（迦楼羅炎）”や、装飾（垂飾先端の絹飾）、配色原理など、他の平安仏画には見出しにくい特徴があることを指摘する。また、岩座にみられる高度な皴法などには、11世紀当時、中国・宋より伝来していたと推察される最新の造形表現もみられることをも指摘する。続いて、本発表の核心である絵師の問題を、これまで青不動制作者の最有力候補として挙げられてきた玄朝、円心の各々の作風を伝える白描図像を分析することで検討する。そしてその結果、青不動が玄朝の造形感覚に極めて近似した作風を持つ一方、円心のそれとはかなり異なる作風を有する絵画であることを明らかにする。最後に、上記までの検討で得られた情報を踏まえ、史料にみられる、南都・飛鳥寺を主な活動拠点とし、東大寺の大仏殿懸用の曼荼羅を修理したという玄朝の事績、南都と天台の交流、興福寺と天台の共通のパトロンとしての藤原氏の存在などにも改めて着目し、玄朝こそが、天台宗・良源周辺の僧侶との共同作業によって、青不動を描いた存在である蓋然性が極めて高いという結論に至る。本発表が導き出す一つの解釈が、青不動という類稀な名作をめぐる更なる研究の一契機となることを願いたい。